

1：女考古学者

シャボンディ諸島、サウザンドサニィ号船内。

「……」

チンチンの実を食べ、ロビン、ナミとエッチをしまくっていた男は、彼女たちの寝室で全裸待機していた。

この2年間と言うもの、ナミとロビンは真面目に修行するために男に会っても精液を口から摂取したりするだけで本番行為は行っていない。

特にこの半年は会うこともなく、最後の調整に勤しんでいたようだった。

『シャボンディ諸島に戻ったらいっぱいエッチしましょう♡』

二人の言葉を胸に、他の女に走らず待ち続けた男のチンポはもはや限界寸前だった。

早くどちらかにあって膣内射精をブチ決めたい……

そう思っていた時、遂に寝室の扉が開いた。

ガチャ……

「あら……ふふふっ、もう裸になって、勃起させてるのね」

扉を開いて部屋に入ってきた人物は、三十路になって女としての色気が限界突破していた麦わらの一味の一人、悪魔の子、ニコ・ロビンだ。

長くなった黒髪を美しく靡かせながら、大人の女のグラマラスな女体を惜しげもなくむき出しにしているような服装をしている。

上半身はショート丈のジャケットを着ており、二年前よりデカくなった胸が張り裂けんばかりに実っている。

ジャケットしか来ていないため、腹部が見えており、下腹部の腰回りが異常に厭らしく露出されている。

下半身はパレオスカートで包まれており、スリットになっている部分から見える脚の艶肉が厭らしすぎて輝いているように見えた。

二年前よりも明らかに色気が増して、男を誘っている様にしか見えない格好をしているロビンに、男は興奮のあまり飛びつき、パレオスカートの中へ身体を入れる。

「んんっ♡ もう……いきなりね♡」

ロビンは特に抵抗することなく、脚を広げつつ男をスカートの中に受け入れる。

瞬間、蒸れた空気と大人の女のセクシーな匂いに包まれて、肉棒が一段階さらに膨張した。

パレオスカートの中は少し薄暗いが、生地が薄ピンク色なので太腿と股間自体ははっきり見える。

男は蒸れによる汗で少し輝いているように見える太腿に力強く顔面をめり込ませる。

「んんっ♡♡ んふっ♡」

するとロビンは、少し股を開いた後、再び腿を閉じて、男の頭を太腿で閉じた。

ムギュッ♡♡♡♡♡♡♡♡

「んぐっ!? んあっ!!!」

腿肉で顔を挟まれて一瞬呼吸困難に陥りそうになる男。

それぐらいロビンの太腿肉は厭らしく男の顔にまとわりつき、より蒸れた濃い匂いをまき散らしながら挟んでいた。

男は興奮のあまり、両手でロビンの太腿や尻肉を触りだす。

ムニムニ

ロビンの尻肉は以前よりも柔らかくなり、指がより肉の奥深くまで沈み込みやすくなっているが、力を抜いた瞬間、押し戻される力が強く、張りがあることがしっかりと感じられた。

男の精子をたっぷりと体内に取り込んだ肉体は、確実に厭らしさが格段にアップしているようだった。

自分の精液で厭らしくなった身体を久しぶりに好き勝手弄ることが出来る。

興奮が高ぶりまくってきた男は太腿の間でより激しく顔をモゾ突かせて腿肉の感触を楽しみながら、尻肉を揉みこんだ。

紺色のセクシーなショーツに包まれた尻肉は、ショーツに収まり切っていないデカ尻のようで、はみ出した尻肉がぶにぶにとより厭らしい感触を感じさせてくれた。

「す〜〜〜〜〜〜〜……はあ〜〜〜〜〜〜〜」

蒸れて濃厚になっている股間の牝臭の生臭さを感じながらの、尻肉や腿肉の揉み解しにより、男は肉棒を扱きたい欲求に駆られるが、同時に両手で牝肉を揉みしだいたまま射精したいという欲もあった。

そう考えながらショーツの下の方からはみ出して盛り上がっている尻肉の部分を掴んで引っ張る。

「あんっ♡ んっ♡ んあっ♡♡ 良いわよ♡ この二年間で厭らしさが溜まりに溜まった私の身体を、存分に味わいなさい♡」

男の艶肉揉み揉みに時折甘い声を漏らしながら太腿の力を緩めたり強めたりしだすロビン。

三十路になって男とのセックスを我慢していたためか、本格的に性欲が爆発しだして、身体を触られているだけで絶頂しそうになっている。

ロビンの厭らしい反応に男も呼応するように反応して指先の動きが激しくなり、どんどんどんどん尻肉が揉みくちにされた。

グニョンッグニョンッグニョンッ!!

「んんっ! んあっ♡♡ はあっ♡」

「ぢゅるっ!!! ぢゅううう!!!!」

尻肉を揉んでいきながら時折太腿肉に勢い良く吸い付き、マーキングするようにキスマークを付けていく。

強めに吸い付けば吸い付くほど女体の下半身が小刻みに震えて、感じているということが伝わってくる。

「ふんっ！！ ふぐっ！！」

ズリュッ

興奮堪らなくなった男は、太腿に挟まれている頭を無理やり上に持っていくと、舌先をショーツに滑り込ませて膣内をベロでかき回し始めた。

「れろっ！！ くちゅ！ れろっ！！ れろっ！！」

「んおっ！？ おおっ♡♡ ああっ♡♡♡」

既に愛液が漏れていた膣内に舌を滑り込ませてかき回し始めると、チンチンの実の能力によって舌がより長く、より大きく肥大化していく。

「あっ……はああっ♡♡♡」

ミチミチに膣内を圧迫するくらいの大きさになった舌が、無理やり拡張させるように膣壁をかき回し、強烈な刺激をロビンに与え始めた。

腰を逸らせつつ、全身を痙攣させて感じまくるロビン。

久しぶりの性の刺激は三十路の性欲爆発女体には刺激的で、以前よりもより敏感に感じるようになっていた。

それもあってか、ロビンは男が両手を使って尻肉を揉みこんでいることに気づいた。

「んっ♡ んふっ♡ 体突き（クエルポフルール）」

そして、厭らしい笑みを浮かべると、両手をクロスさせて自身のハナハナの能力を発動させる。

何か能力を発動させたことには気付いた男だが、とりあえず三十路マンコの味が美味しすぎて夢中で舐め回していると、突然チンポに蕩けるような強烈な刺激が襲い掛かってきた。

「んんぐっ！？ ふぐっ！？」

肉棒が生暖かく粘着いた何かに包まれて、触手のようなニユルニユルが絡みついてくる。

「んぢゅっ♡ れろっ♡ ぢゅうっ♡ ぢゅっ♡ ぢゅっ♡」

チンポからくる吸引されている刺激と、舐めるようにまとわりつく触手の感覚。

男は肉棒からくる謎の刺激に疑問を抱いてしまい、少しクンニの動きを止めてしまう。

するとロビンが艶のある笑い声を漏らしながら、男が今感じている疑問に答えてくれる。

「ふふふっ♡ そうよ♡ 今あなたが考えている通り……私の力で、もう一人の私がフェラしているの♡」

ロビンに頭の中を見透かされたように辿り着きそうだった答えを告げられて、肉棒が今どういう状態に陥っているのかが明確に脳に浮かび上がってきたため、快感もよりダイレクトに伝わってきて、男は一気に高ぶってしまう。

興奮した男は両手に力を込めてより強く尻肉を鷲掴みにして三十路股間を自分へ押し寄せると、舌先を膣内の奥の奥まで滑り込ませた。

「んぐっ！！ れろっ！！ じゅるっ！！ れろっ！！」

極太舌にまわりついてくる膣肉のヒダヒダを強引に押しつけながらかき回していくことで、奥の方からどんどん愛液が漏れだして来て、滑りが良くなり動きやすくなる。

「はっ!! はあああっ♡♡♡」

ロビンは全身を痙攣させつつ前屈みになりながら、激しいクンニで快感を感じていた。

いつものクールな表情はどこへやら、歯を見せるような笑みを浮かべて涎を垂らし、愉悦で蕩けた瞳を潤ませながら、顔を上気させ久しぶりの女としての快感を味わい尽くしている。

ロビンが前屈みになる事でより太腿が締められ、男の顔が潰れそうなくらい下半身に力が入っていた。

「んっ♡ んあっ♡ はあっ♡ 私も……負けてられないわね♡」

ロビンは快感に溺れた笑顔を見せつつ、手をクロスさせたまま、ハナハナの実の能力を使ってより激しく男のチンポを吸い始める。

「ぢゅるっ♡ んぼっ♡ ぢゅっ♡ ぢゅっ♡ ぢゅううう♡♡♡♡」

もう一人のロビンは男の両太ももをがっちりと掴んで、天を向いている肉棒を抑え込むように加えながら、鼻の下を伸ばし頬を窄めたバキュームフェラを開始する。

「んんっ!? んぐぐぐっ!?!?!?!?!」

チンポを根元までしっかり唇で加えながら固定させて、頭を小刻みに震えさせているくらいの力を込めて吸い付きつつ、チンポを引き抜こうと頭を後退させていくロビン。

「ん ぢゅうううううううう!!!!!! ぢゅっ!!! ぢゅううううううう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

鼻の下を伸ばした下品な馬面バキュームで男のチンポを刺激しまくり射精を促していく。

男がフェラをしているロビンの下品な顔を見たらさらに興奮が増していたことだろう。

だが今は目の前にある熟熟の蒸れマンコに集中し、膣内をかき回していく。

「んんっ♡♡ はあっ♡ 良いわ♡♡♡ イキそうよ♡♡ もっと激しく♡♡ もっと強く! 三十路になって本気になった私のオマンコ、舐め尽くして頂戴♡♡」

ロビンの卑猥な言葉が男の耳の中に響いてきて、脳を刺激し、舌の動きを活発化させる。

男はこれからチンポをブチ込んで精液をたっぷり注ぎこむ子宮口に舌先で触れて、あいさつ代わりと言うように舐り始めた。

より柔らかさを感じる子宮口の肉の感触が舌先から伝わり、さらに激しく舌を動かすことによって愛液が溢れてくる。

「はっ!? あああああっ♡♡♡♡♡♡ 子宮口を!! 舐めるなんて♡♡♡ あっ……ああああっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

かなり敏感な部分を厭らしく舐められることによってどうしようもない快感を感じて、身体をくねらせ善がり狂うロビン。

「ん っ♡♡♡♡ ん ん ん ん ん ん っ♡♡♡♡♡♡♡♡ ぢゅっ♡ ぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅ
ぢゅぢゅぢゅ♡♡♡♡♡♡♡♡」

久しぶりの本気フェラを受けて男の精子も金玉から上がってきて、肉棒もビクついてくる。

「んっ♡♡　んあああっ♡♡♡　はあっ♡　あああっ♡♡♡♡♡♡♡　イクツ……イクウツ♡♡♡♡♡♡♡♡
♡」

「れろっ!　れろっ!!　ぢゅうううううううう!!!」

「ん ん ん ん ん ん ん つ♡♡♡♡♡♡♡ ♪ゅっ……♪ゅううううううう♡♡♡♡♡♡♡
♡」

「はあっ……あああああああああああっ♡♡♡♡♡♡」

「んんっ!? ごくっ! ごくっ!! ごくっ!!」

「ん つ! ? ん ん つ♡♡♡♡ ごきゅっ♡ ごきゅっ♡ ごきゅっ♡」

「ちゅちゅう♡　ちゅっ♡　んぼっ♡　ご馳走様♡」

「はあ……はあ……はあ……」

そしてロビンと男は二人ともに久々の性的な絶頂に息を切らしつつ、心地い虚脱感に襲われながら息を整えている。

だが男の方では変わらず蒸れたスカート内にいるのでロビンのフェロモンがずっと脳に直撃しており、潮を飲んだことにより、早くも肉棒が元通りギンギンに勃起してくる。

バツ！！

射精したものの膣内には入れてないので興奮堪らなくなった男はスカート内から飛び出して、ロビンの身体に抱き着いた。

「あんっ♡ ふふっ♡ どうやらまだまだヤレそうね♡」

男はロビンに声を掛けられながら、ぱっくりと開いて谷間が見えている胸元に顔を埋めた。

「んぐっ！！ んんっ！！ ロビンさんこそ！ 三十路になったって言うのに、胸も前より大きくなって…
…こんな……男を誘う格好して……一体なんの修業をしてたんですか！！ んんんっ！！ んちゅっ！」

男はロビンの胸に吸い付きながら顔を押し付け、股間のモノをへこへこと擦り付ける。

「んふっ♡ ちゃんと修業しながら頭の中で毎日あなたのチンポの事は考えていたわよ♡ 男を誘う格好も……効果があったみたいね♡」

そう言いながらロビンは右手で男の頭を優しく撫でる。

ロビンが一体誰を誘っていたのか明確に分かった男は、胸元のジッパーを下げてデカパイを露出させた。

ボヨンッ！！

「んんっ♡」

明らかに二年前よりも大きくなったデカパイを見てさらに興奮した男は、すぐさま乳首に吸い付いた。

「んんつまっ！ んぢゅっ！ ぢゅうっ！！」

久しぶりのロビンの乳首と言うこともあって、明らかに美味しさを感じてしまうピンク色の突起物に、男は力強く吸い付く。

胸も以前より大きくなっているものもあるが、しっかりとした張りもあり、いつまでも顔を埋めていたくなるくらい、柔らかさと温かさが感じられる。

男とロビンは抱き合ったままふらつきながら自然とベットの方へ身体を運んでいく。

絶頂を味わった後のため、まだ体が虚脱感に襲われており、千鳥足のようにふらついているため、不規則なヒールの音が室内に響き渡る。

そのふらついた長身の女体に抱き着き、支えながら男はロビンの身体を誘導した。

だがベットに向かう途中だろうと、二人は激しく身体を絡ませ合い、ふら付きついている。

そして倒れ込むようにベットに横になると、男はまずロビンのパレオスカートを取った。

「んんっ♡♡」

スカートを取り、肉厚でムチムチな太腿と股間部が現れて、官能的な見た目が格段にアップする。

「はあ！ はあ！ はあ！」

「ふふふっ♡ 息が荒いわよ。早くチンポを挿入れて、オマンコズボズボしたいのね♡」

「はい!」

男が元気よく返事をする、ロビンが脚を開いて、右手の指でショーツをズラシながら、膣口をぱっくりと開けた。

ニュチャ……

クンニ絶頂で既にセックス準備が出来ており、愛液が駄々漏れで粘膜音を発しているロビンの膣口。

人差し指と中指で開かれて柔らかいマン肉の中で、膣壁がチンポに突っ込まれたように卑猥に蠢いている。

「さあ、いらっしやい♡ 性欲が増した本気の三十路マンコで、いっぱい気持ち良くしてあげるわ♡」

「っ!？」

ロビンに誘導された瞬間、男は一気にチンポを三十路マンコに突っ込んだ。

ズリュッ!!!!

「あっ……ああああああっ♡♡♡♡♡♡♡♡」

ロビンの膣内に挿入する瞬間に、男のチンポはロビンの膣内を圧迫するような大きさに形を変えて、そのデカマラが一気に三十路女の子宮口まで貫いた。

久しぶりのチンポで、いきなり膣内をギチギチに圧迫されながら子宮口を強く押されて軽くイってしまうロビン。

一瞬で身体を逸らせ、口と目を大きく開けて瞳を潤ませながら愉悦の笑みを浮かべて快感を感じている。

男は小刻みに震える長身女体をまじまじと見つめる。

二年ぶりにチンポを突っ込んだニコ・ロビンの女体。

髪がロングになって色気と優しい雰囲気アップしており、改めて極上の女だということが伺い知れる女体。

上半身はショート丈のジャケットを羽織ったまま、胸を突き出し、下半身はショーツを履いたままチンポを飲み込んでいる。

肉厚のデカ尻に分厚い太腿が小刻みに痙攣しており、自分のチンポで感じまくっていることが一目瞭然だった。

この時、二年間本番エッチをしてこなかった男のタガが外れてしまう。

男は両手でがっちりとロビンの括れを掴むと、勢い良くピストン運動を始める。

パンッ!! パンッ!! パンッ!! パンッ!! パンッ!!

「はあっ!! あっ♡♡ あっ♡ ああっ♡♡ 良いわあ!! あなたのチンポが来てるっ♡♡♡♡♡
もっと激しく突いて頂戴♡♡ 二年ぶりの……本気チンポ♡♡♡♡♡♡♡♡」

「はあ!! はあ!! ロビンさん!!!!!!」

ロビンの膣内の締め付けは想像以上だった。

久しぶりのチンポということもあって、締め付けが強くなっており、膣肉の肉ヒダがうねうねとチンポに纏わりついてくる。

素早くピストンしているにも関わらず、マン肉がチンポにしっかりと絡んできて、勃起状態の敏感肉棒に的確に快感をもたらしている。

そして何より男を興奮させているのは、ニコ・ロビンにチンポを挿入しているという事実だ。

長身のムチムチ女体の下半身に自分のチンポが挿入されている。

股間にある膣口のマン肉を押し広げて挿入されている自分のチンポを見て、男の独占欲と支配欲と性欲が高まっていく。

「ん ん っ♡ はあっ♡ ああああっ♡♡♡ 良い♡♡ これよ♡ あなたのチンポ♡♡ 三十路マンコをギチギチに圧迫して……押し広げて……♡♡♡ 奥まで激しく突いてくる♡♡♡ はああああああっ♡♡♡♡♡♡♡」

身体を逸らせて両手でベットシーツを掴み、快感に女体を悶えさせながら男のチンポを受け入れるロビン。

「はあ！ はあ！ 反応がドスケベすぎますよロビンさん！！ セックスは……かなり強くなってますね！！！！」

本当に修行してきて戦闘面で強くなったのか疑わしいくらい、反応がスケベすぎて、セックスばかり強くなっているようなロビンに、男はチンポをブチ込みまくる。

「はあっ♡ ああっ♡♡ んんっ♡♡ そうよ♡ 毎日毎日あなたのチンポの事ばかり考えて、セックスも強くなったのよ♡♡♡」

「ぐううう！！ この！！ ドスケベ三十路海賊めっ！！！」

男はロビンの反応に我慢ならなくなり、上半身を寝かせてロビンの脇の下から両手を回して肩をがっちり掴んで、身体を密着させる。

デカパイが柔らかく反発してくるが、男はそれを容赦なく押しつぶして肉体と肉体を密着させた。

「ロビンっ！！ ロビンっ！！ 結婚しろ！！ 航海が終わったら……このドスケベ三十路マンコ……独占ラブドールにしてやる！！！」

「んんんっ♡♡♡♡♡♡ 良いわよ♡♡♡♡ あなたの求婚チンポ！！ 受け入れてあげる♡♡♡♡ ドスケベ三十路マンコ、あなた専用のチンポケースにして頂戴♡♡♡♡♡♡♡♡」

求婚を受け入れた三十路マンコがより一層窮屈になり、チンポを逃がさないように肉ヒダが肉棒を締めあげてくる。

マン肉の内側が捲れあがり、チンポを引き抜こうとするたびにいちいち盛り上がってエロさが際立つ。

互いの身体を密着させて体温を感じながらのラブラブエッチで、二人の性欲はどんどん高まっていき、絶頂が近づいてきた。

男の金玉から精子が放りあがり竿をピクつかせ、ロビンの膣口も精子が来るのを今か今かと愛液をたらしながら待っている。

「んんんっ♡♡♡♡♡♡ イクッ!!! 求婚チンポで♡♡♡ プロポーズされながら……三十路マンコ、イクッううう♡♡♡♡♡♡」

絶頂を感じ取ったロビンは男を大好きホールドでがっちりと抑えた。

ロビンのむっちり大人の女体にがっちりと抱き着かれて、男の興奮も最高に高上り、チンポも肥大化する。

「ん`ん`ん`っ……良いいいいっ♡♡♡♡♡♡♡♡ チンポがまだ膣内で大きくなってる♡♡♡ もう墮ちてる三十路マンコをまだ虐めてくるのね♡♡♡♡♡♡♡♡ んちゅっ♡♡ ぢゅるっ♡ れろっ♡」

さらに膣内を拡張され快感堪らなくなったロビンは、男の口に舌を突き入れて濃厚なベロチュウをやり始める。

ロビンの舌が執拗に男の舌に絡みつき、べちょべちょと粘膜音を下品に響かせる。

クールだったロビンの余りのドスケベっぷりに男のチンポも我慢の限界が来た。

「んちゅっ♡♡ ぢゅるっ♡ くちゅ♡ はっ♡ あああっ♡♡ 来て!!! 膣内に♡♡ 子宮にいっぱいあなたの子種をブチ込みなさい♡♡♡♡」

チンポを気持ち良くするというよりも、もはや自分が気持ち良くなりたいドスケベっぷりを見せながら精子を要求してきたので、男はその通りに射精する。

ドッピュウウウウウ!!!!!! ドッピュウ!!!! ドッピュウ!!!! ドッピュウ!!!! ドッピュウ!!!! 1 ドッピュウ!!!! ドッピュウ!!!!

「んああああああああああっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

射精された瞬間、甲高い声を響かせながら、口と目を大きく開いて盛大に膣内射精絶頂しまくるロビン。

もちろん男を抱きしめたまま、激しく身体を悶えさせている。

膣内はチンポの射精のリズムと共にさらに強く肉壁が締めあげて、子宮の中にすべての精液を受け入れようとしていた。

「はあっ……♡ ああっ♡ はあ……♡ んっ♡ くちゅ♡ れろっ♡ これで完全に私の身体はあなたのモノになったわ♡ 大事にしてくれるかしら？」

「もちろんです……れろっ……くちゅ……これから毎日……たっぷり精子を注いでいきます……くちゅ……れろっ……」

「んふっ♡ 楽しみだわ♡ 期待してるわよ、あなたのチンポ♡♡ ドスケベオマンコ、いっぱい愛して頂戴♡♡」

二人は身体をくねらせ絡み合わせながら、ベロを絡み合わせたキスを続けていた。

ぶびゅぶびゅと膣内に入りきらなかった精子が漏れ出てきて、下品な音を立てつつも、その音にさえ男は興奮し、再びマンコの中で肉棒を大きくさせている。

この後もしばらくサウザンドサニー号では、女のうめき声のような音がしばらく響いていたそうだ。

.....

.....

.....

「んんっ♡♡ ふふふっ♡ 今度は私が動いてあげるわ♡ そこでおねんねしてなさい♡」

男はロビンに言われた通り、仰向けでベッドの上に寝転がった。

するとロビンは男から後ろを向いて、チンポの丁度上に来るように、股の上に跨った。

男から見えるのは美しい背中に見事に括れている腰回り。

そしてそこから下に行くとは括れとは反対に肉が突き出ている三十路女のデカイ尻だ。

腰回りの見事な曲線美からくる肉厚のデカ尻は美しさもあり、それと同時に異常なまでのエロさがあった。

既に勃起している肉棒に、さらなる刺激を与えてビクつかせてしまう。

「ふふっ♡♡ こんなに勃起させて……」

ロビンは男の反応を見ながら艶やかな笑みを浮かべ、右手でチンポを優しく撫でつつ自身の膣口にあてがった。

「じゃあ、行くわよ……すぐ射精ないように……頑張りなさい♡♡」

そして妖しく腰をくねらせると、一気にケツを落としてチンポを膣口の中に挿入した。

ズリュッ！！！！

「んんんんっ♡♡♡♡♡♡」

ロビンがデカ尻を落とした瞬間、肉棒が一気に三十路マンコに飲み込まれて、極上の締め付けでチンポを快感へ導く。

挿入しただけで一瞬射精しそうになった男だが、何とか我慢して下半身に力を入れて持ち堪えた。

「んゝ んゝ っ♡♡♡♡ んあぁっ……♡♡ んっ♡」

ロビンの方はどうやら絶頂しているらしく、身体を小刻みに痙攣させながら、喘ぎ声を漏らしており、膣内も締め切り切っている。

「ふう……♡ んんっ♡♡ 軽くイっちゃったわ♡ まったく本当に厭らしいチンポね♡ こんなに簡単に女をイカせるなんて♡」

そう言いながら腰をくねらせ絶頂後の膣内の感覚をチンポでかき回しながら楽しむロビン。

三十路のクールな考古学者が厭らしい笑みを浮かべながら自ら腰をくねらせてデカ尻を動かしチンポを楽しんでいる姿は、男の視覚を刺激しまくり興奮させた。

「私のケツ振りを見て興奮してるのね♡ チンポがビクついてるわよ♡ いいわ、これから私の本気のケツ振りでいっぱい気持ち良くさせてあげる♡ 準備はいいかしら？」

男は頷きながらも下半身に力を入れてチンポを極限まで硬くさせる。

すると膣内の肉壁がチンポにより絡みつきたした。

そして、ニコ・ロビンの本気のケツ振りが始まる。

「んっ……ん`ん`っ！！！」

パンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッ！！！！！！！！！！

ロビンは両手を両膝の上に置いて踏ん張りながら腰を振り、デカ尻を上下に揺らしながらピストン運動を始める。

「ん`っ!`ん`ん`っ♡♡`ん`っ!!`ん`ん`っ♡♡♡♡」

ロビンのケツ振りは力強く凄まじいものだった。

素早いケツ振りながらも引き抜こうとするときには膣口のマン肉が盛り上がり、チンポへの吸い付きが凄まじいことを物語っている。

そして膣内に押し込むときに同時にデカ尻が腰回りにプレスされて、肉の打撃が性的な快感を増やしていた。

ケツプレスをやっている見た目も凄まじく、長身の身体で下品に気張ったポーズでケツを激しく振っており、厭らしさがあるが、それと同時にケツプレスするとバチンバチンと尻肉が震えてエロさがさらに増している。

「ん`あっ♡♡♡`ん`っ♡`あ`ああっ♡♡♡`イクっ♡♡`イ`グうう♡♡`ケツ振りしながら、チンポでイクうう♡♡♡♡♡♡♡♡`はああああああっ♡♡♡♡♡♡♡♡」

ロビンはケツを振りながら絶頂しているようで、男からは見えないが口と目を一杯に見開き、善がりながらケツプレスを繰り返している。

ロビンが絶頂するたびに膣の締りが一段と強くなるので、チンポへの余りの刺激の強さに男もギリギリの状態だ。

「はあああっ!!`ああっ♡♡`良いい♡♡`チンポ気持ちいいいいいい♡♡♡`さっきからあなたのチンポでデカ尻揺らしてイキまくってるわ♡♡♡♡♡♡♡♡`あなたもチンポビクつかせてもう限界なんですよ!!!`ちゃんと見てなさい!`あなたの嫁のドスケベ三十路女がデカ尻厭らしく振って、精子子宮にぶちまけられてイクところを!!!!」

三十路女のケツ振りがさらに激しくなり、股間に打たれる尻肉のつよさが凄まじく、その衝撃で射精しそうになってしまう。

ロビンの尻のアナルも気合を入れているため、ピストンするたびにヒク付き、クパクパしている。

見た目のエロさもさることながら膣内も先ほどからの連続絶頂で絞めつけつつも時折緩んだりと変化を見

せながらチンポを刺激してくる。

さすがに男も耐えきれず歯を食いしばって入るものの、チンポも限界が来た。

「はあ！！ はああっ♡♡♡ チンポが膣内でビクビクしてる♡♡♡♡ 来るのね♡♡♡♡ いいわ♡♡♡♡
♡ 射精して頂戴♡♡ いっぱい射精して、三十路マンコの子宮の中、満たすのよ♡♡♡♡」

同時絶頂の準備が出来ているロビンに許可を貰ったため、男はケツ肉が股間にビタンッ、とプレスされる瞬間を狙い、膣内射精した。

ドッピュウウウウウ！！！！ ドッピュウ！！！！ ビュルッ！！ ビュルッ！！ ビュルルルルッ！！
ドッピュウ！！！！ ドッピュウ！！！！

「っああああっ♡♡♡ イックうううううう♡♡♡♡♡♡♡」

ロビンはしっかりとケツを男の股間にねじねじと押し付けて、亀頭で子宮口を押し上げながら膣内射精を受けて特大の絶頂を感じていた。

綺麗な背中中の腰を逸らせて、ブリッジせんばかりに頭も反らせながら、舌を突き出した痙攣絶頂。

明らかに二年前よりもスケベさをパワーアップさせたケツ振りで、チンポに媚びつつ絶頂していた。

「はあ……♡ はあっ♡ はあ……♡ んっ♡」

そのままロビンは虚脱感に身を任せて男の上に寝そべった。

そして右手を男の頭に絡めると、そのままベロチュウを始める。

「んっ♡ れろっ♡ くちゅ♡ どうだったかしら？ 私のケツ振り……って、聞くまでもないわね♡♡
こんなにいっぱい射精してるんだから♡♡」

ロビンが自分の下腹部を撫でているところに、男も自分の手を被せて、撫で始める。

子宮にたっぷりたまった精液を感じながら、ロビンは男の上でそのまま心地よい虚脱感に身を任せた。